

ウィルソンのサクソルンバス新製品

ウィルサックス

とサクソルンバスについて

日本ではいまだなじみが薄いサクソルンバスだが、フランスを中心にその魅力が見直され、ソロやアンサンブルでも活躍するシーンが見られるようになった。そんな折も折、ウィルソンからサクソルンバスの新製品「Willsax」が登場！
今月の表紙を飾ったその楽器を前に、パリ国立高等音楽院でサクソルンバスも学んだ露木薫さんに、サクソルンバスの基本的な話やWillsaxについて聞いた。

●インタビュー……**露木 薫**（ユーフォニアム奏者）



Willsaxの開発に関わり、この楽器で精力的に演奏活動が続けるフランスのサクソルン四重奏団「Opus 333」（別掲に紹介記事）。

——露木さんはパリ国立高等音楽院のチューバ・サクソルン科に学んだ最初の日本人ですが、パリ音楽院ではサクソルンバスも勉強したそうですね。
露木 ユーフォニアムで入りま

ユーフォニアムよりも明るくてクリアな音が出る。
そうした音色がフランス人の好みなんです。

したがサクソルンバスのレッスンも受けました。その時に向こうで買った楽器を今でも使っています。当時のパリ音楽院のクラスはサクソルンバスを吹く学生がほとんどで、ユーフォニアムで卒業した人間は僕くらいでした。
——サクソルンバスはそれほどフランスでは一般的な楽器？
露木 普通に使われています。日本でユーフォニアムが占める位置をフランスではサクソルンバスが占めていると言ってよく、使い方もほとんど同じ。もちろんユーフォニアムも、僕がいた頃からフランスで使われ出し、その良さも知られているのですが、音色の好みはフランスではユーフォニアムよりもサクソルンバスなんです。
ギャルドなどもずっとサクソ

ルンバスを使い続け、曲によってユーフォニアムを使う時もあります。基本は今でもサクソルンバスです。ちなみに彼らは、ユーフォニアムを使う時は全員がユーフォニアムに変え、サクソルンバスと混ぜて使うことはないようです。
——サクソルンバスの音の特徴は？
露木 明るくてクリアな音が出ます。かと言って柔らかい音も出る。フランス人にとると、ユーフォニアムの音は美しいんだけれども、もう少しアグレッシブでパリッとした雑多な要素が欲しいと。
——サクソルンバスと聞くと、アルトホーンやテナーホーンなどと同じサクソルン属の楽器というイメージが湧きますが、フ

ランスでサクソルンをそうしたファミリーの中で使うこともあるのですか。
露木 フローラン・シュミットの「ディオニュソスの祭り」(1955)に見られるように、大昔の大編成の吹奏楽ではサクソルン属の楽器がいろいろ使われていましたが、その後の吹奏楽の世界で使われなくなったという点はフランスも日本と全く同じだと思います。
——サクソルンバスのために書かれたオリジナル曲というのは沢山あるんですね？
露木 ええ、音楽院の試験のためにコンクールピースがたくさん作曲され、今でも時々書かれているようです。有名なものは、日本でもユーフォニアムの



ウィルソンから発売されたサクソルンバス「Willsax」。詳細は別掲参照。



学生たちが取り組むカステレー
デの「ファンタジー・コンチェ
ルトアンテ」。サクソルンバスは
ユーフォニアムに比べて低音域

が広く使えますから、こうした
曲をユーフォニアムで吹くと、
ペダルの音がたくさん出て来る
など低音域で苦勞します。だか

ら、サクソルンバスのために書
かれた曲は敬遠されることも多
い（笑）。オリジナルの作品が求
める音色も含め、こうした曲は

サクソルンバスで演奏した方が
効果が出やすいでしょうね。
——日本でサクソルンバスで演
奏されたことは？

露木 リサیتالで一部のそう
したオリジナル曲を吹いたりす
ることはありますが、演奏機会
は多くありません。

露木 薫（つゆき・かおる）1988年東京藝大卒。同大学院に入学するが同年パリ国立高等音楽院に入学。1991年同院を審査員全
員一致の1等賞で卒業。第3回日本管打楽器コンクール3位、第6回同コンクール1位。ソロやオーケストラ、吹奏楽の客演で活
躍。名古屋音楽大学准教授、東邦音楽大学特任准教授、洗足学園音楽大学客員教授、東京藝術大学・愛知県立芸術大学各非常勤講師。



WillSAX でエキサイティングな活動を展開中！

サクソルンバス・カルテット “Opus 333”

- メンバー：Vianney DESPLANTES、Jean DAUFRESNE、Patrick WIBART、Corentin MORVAN
- プロフィール：パリ国立高等音楽院に学び2011年に卒業したメンバーで結成された。同院の室内学科でアンサンブルを磨き、多くの国際コンクールで受賞している。サクソルンバスのために書かれたオリジナル曲やクラシックからポップス、ジャズまでの編曲作品など幅広いレパートリーを持つほか、ベンジャミン・アタイル、アレクサンドロス・マルケアス、アーレリアン・デュモンなどの作曲家たちに作品を委嘱しコラボレーションを行っている。パリの主要ホールで公演を行うほか、ヨーロッパの音楽祭にも参加し、活動の場を拡大中。彼らのサイトでは音も聴ける。<http://www.opus333.com>
- WillSAX との関わり：ウィルソンの新しいサクソルンバス「WillSAX」は彼らの協力を得て2年間かけて完成された。WillSAX によるセミナーなども行っている。

コンペンセイティング システムが付いたのは画期的

— 今度新しくウィルソンから「WillSAX」というサクソルンバスが発売されましたが、サクソルンバスは以前からこのような形だったのですか。

露木 コンペンセイティング・システムになったのは比較的近いです。その前は5本ピストン

が主流でした。3番ピストンが1音半ではなく2全音（三度）下がる長さで、4番は四度、5番は五度下がる。そんなバルブの組み合わせで音程の良い楽器にしようとしていたわけです。

反面、指使いは慣れない人にはかなり複雑になります。それをコンペンセイティングにしたことで、音の抜けの良さはそのままに、一般的なユーフォニアムと同じ指使いで吹けるように

なりました。使いやすさという点では現在のサクソルンバスは画期的ですね。

— サクソルンバスとユーフォニアムとの構造上の違いは？

倉林（ウィルソン国内総発売元のグロバル担当者）サクソルンバスのマウスパイプはユーフォニアム

よりも長く、その分、2番管がかなり短くなっています。ボアはユーフォニアムよりは小さめだと思えますが、メーカーによって差があります。

露木 ベルを見ると、おそらくユーフォニアムの方がより円錐形だと思えますが、目で見て違

いが分かるほどではない。

倉林 同じサクソルンバスで比べると、WillSAXのベルはクルトワよりもやや大きめで、管のボアはやや小さめです。

露木 クルトワの方が、もう少し細いところから拡がっているように見えますね。コンペンセ

以前は5本ピストンが主流。コンペンシステムが付いてユーフォニアムと同じ指使いで吹けるように。



イテイング・システムで、主管にトリガーが付いているのはクルトワと同じ。ベルが多少ウィルソンの方が太い。この点ではウィルソンのユーフォニアムに共通するものを感じます。

「展覧会の絵」の「ピドロ」で吹いてみた

——サクソルンバスの可能性をどのようにご覧になりますか。

露木 トランペット奏者にとつてのコレネットのような楽しみがあるんじゃないでしょうか。ユーフォニアムとは音程のクセが違い、最初は使いづらいと感じるかも知れないけれど、ソロ楽器として音色の違いを楽しめるだけでなく、合奏の中で使っても面白いと思います。

——サクソルンバスを揃えているバンドは日本には？

露木 まだないでしょうね。ただ「煙突」と呼ばれていた昔のニッカンのユーフォニアムの巻はサクソルンバスに似ている。フランス式の楽器を取り入れた軍楽隊の影響の名残かも知れま

せん。

——ラヴェルが編曲した「展覧会の絵」の「ピドロ」はサクソルンバスで初演された？

露木 初演はボストン交響楽団ですから、ユーフォニアムだった可能性もあります。しかし、

ラヴェルがいた時代のフランスのオーケストラのチューバは、6本バルブのC管のサクソルンバスでした。それを「フレンチ・チューバ」と呼んでいた。フランス人に

ウィルソンの新サクソルンバス

WillSAX A18 ●ウィルサクス A18

ウィルソン社の開発チームとフランスのサクソルンバス四重奏団「オーバス 333」との緊密なコラボレーションで誕生した新しいサクソルンバス。きらびやかで力強いサウンドを持ち、操作性も良い。ソロだけでなく室内楽やアンサンブルで自由な表現を可能にするだけでなく、洗練された音色と豊かな響きは吹奏楽やオーケストラにもよくマッチする。

【規格】

調子：B♭
ボアサイズ：14.8mm／15.8mm
重量：4.42kg
ベル直径：285mm
4ピストン コンペンセイティングシステム
イエロープラスベル
ニッケルシルバー製スライド
仕上げ：ラッカー、またはシルバープレート
メインチューニングスライド用トリガー付き

【特色】

ウィルソンの特長でもあるシームレスベルにより均整のとれたサウンドを実現。よりコントロールしやすい吹奏感を実現した新設計マウスピースレシーバーの採用（写真下）。マウスピースのスロートエンドからリードパイプまでのギャップを調整可能なBEM マウスピースアダプター（中細管用、太管用）付き。

【価格】

ラッカー仕上げ
¥1,100,000（税抜）
シルバープレート仕上げ
¥1,150,000（税抜）

【問い合わせ】

株式会社 グローバル
☎ 03-5389-5111



わせると、ラヴェルが「展覧会の絵」を書いた頃のチューバはそうしたフレンチ・チューバだったので、「ピドロ」のソロもサクソルンバスで演奏するのが一番ふさわしいんだと。もちろん、現代の指揮者やオーケストラの人たちはチューバで吹いて何の問題も感じていませんが。

——サクソルンバスをアピールすれば使ってみるオケも出て来そうですね。

露木 一度「ピドロ」のリハーサルにサクソルンバスを持って行ったことがあるんですよ。終わってから「どうでした？」と聞いたら、「あれ、知らなかった」とか「え、楽器違ってたの？」と

か……（笑）。みなさんあまり意識していなかったようでした。

現代のオーケストラでは、そうした音色の味や個性よりも音程の良さが優先されます。音程の問題でリハーサルの効率を悪くしてしまうわけには行きませんから、パツと吹いて音程が決まるものをどうしても選んでしまいますね。

指揮者に「テナーチューバがいいですか、ユーフォニアムがいいですか？」と聞くことはありますが、「サクソルンバスかユーフォニアムかテナーチューバか？」と聞いたことはまだない。でも一度だけ、読響でサクソルンバスが入ったメシアンのと

曲をやったとき、ユーフォニアムを持って行ったら指揮者の下野（竜也）さんに「あれ、サクソルンじゃないんですか？」と聞かれたことがありました。

——WillSAXのカルテットで活躍するフランスの「Ous 333」のようなサクソルンバスのグループが日本にも出て来ると面白いですね。

露木 そうですね、日本でもサクソルンバスを持っている仲間が集まってアンサンブルをやってみれば、また違う世界が開けると思います。演奏する側だけでなく、聴く側にもそれが面白いと思うてもらえればなおのこと……。